

緑の風

京都教育大学 環境教育実践センター 発行

第11号 2013年 2月8日

水辺の自然学習

懐かしの木々

農場等協議会

農業実習

夢キャンパス

センターの花々

センター動向

スタッフから



冬のセンター農場

水辺の自然学習

坂東忠司（理学科教授）



メダカが絶滅危惧種に指定（2003年5月）されて10年目を迎えます。当初は全国紙の新聞にも取り上げられ、大きな話題となりました。メダカの危機は、天敵の増加や人の乱獲に原因があるとは考えにくく、水質や水辺の構造など、メダカの生息に適した環境が激減したことが主な原因であると思われまます。テレビニュースの中で、クラスで殖やしたメダカを小川に放流する子どもたちの姿が紹介されることもあります。併せて自然のしくみをきちんと学ぶ必要があります。そうでなければ、棲みたくない環境下にむりやり放流されるメダカにとって、迷惑以外の何ものでもないからです。

リガニであったとしても、相手の習性や好みの住処を注意深く観察し、知恵をしぼり、駆け引きの技を磨くことに夢中です。このように、自然の中に身を置くことで得られる達成感や落胆、そして命を実感する経験は、成人後の心の醸成にも少なからず影響を与えているように思います。

さて、私たちが魚を得ようとするとき、ほとんどの場合に釣り針や竿、網などの人工の道具を用いるのですが、ここでは子どもの頃に先輩から教えてもらった誰にもできる究極のエコ漁法2例をご紹介します。

する早瀬や平瀬で行ないます。手頃な大きさの石（持てる範囲内で大きいもの）をかかえ、きるだけバシャバシャと大きな音を立てながら歩いて行きます。下流から上流に向かって、また、一人より横一列に並んだ数人のほうが効果的です。驚いた魚は逃げ回ります。それもたいていの場合は上流に向かって逃げるのです。その内、一部の魚は浮き石の下にサッと隠れます。そこで、かかえていた石を頭上に振りかざし、この下には居そうだなと直感した石をめがけ、思いっきり投げ落とすのです。的になった浮き石をひっくり返したとき、衝撃波で失神したハヤ（オイカワやカワムツ）がプカリと浮いてくれば大成功という次第です。大人は大型のハンマー（スレッジハンマー）を担いで歩き、両手で振り下ろしていましたが、人工の武器を使わなかった子どもたちの勝ちだと思えます。

つぎは、植物で魚をしびれさせる方法です。小学生の頃、先輩から「この草を集めろ」と言われるがまま、みんなで一抱えほどむしり採りました。当時はその植物の名前まで知りませんでした。今



カワムツ（♂ 婚姻色）

いつの時代も、自然生態系の一員である子どもたちは生き生きとして、狙う生き物の捕獲のためには労力を惜しみません。たとえ相手が観察池の小さなザ

まず、『石打ち（いしうち）』と呼ばれる方法です。川の中流には瀬と淵が交互に現れる場所がありますが、この漁法は手頃な大きさの浮き石が密集

になると、生えている場所や効能から、それはヤナギタデではないかと思っています。まず、川幅の狭い浅瀬の上流に陣取り、水面ギリギリに平らな石を置きます。そして、片手で持てる石ころを拾い上げ、集めた草の葉に水をかけながらカチカチとつぶすのです。この作業も数人で並んで行ないます。しばらく続けていると、下流側でピクピクと痙攣する魚が見られるようになります。その小魚を集めるのです。ヤナギタデの葉は癖のない辛みがあるので、タデ酢としてアユの塩焼きなどに添えられます。また、芽タデと呼ばれる発芽直後の赤い双葉は、刺身のつまにも利用されています。つまり、しびれた魚を食べても全く問題はなく、捕り逃がした魚もしばらくすると元気に復活します。

いずれも、先人の観察力や知恵から生み出された究極のエコ漁法ではないでしょうか。自然への負荷を最小限に、必要な時に必要なだけいただく。私たち自身も自然の一員であることを謙虚に自覚しながら、心豊かに過ごしたいものです。

懐かしの木々(9)

1万本の苗木の顛末(その2)

田淵春三(本学名誉教授)



(前号からのつづき)

10月に入って行動を開始し、まず提供される樹木の綿密なリストを作成した。配布先は学園関係に限定した。理由は(1)公的機関からの提供であること、(2)比較的敷地が広く、当時はまだ植栽の余地が多分にあった、(3)環境緑化と教育的価値が大きいことによる。隗から始めよ、であるが附属農場は既に余地が無いの

で大学からとし、臨時の環境整備委員会を招集した。委員全員一致で学内の植栽が承認されたが、事務局は「想定外」でとくに会計面での援助はできぬ、と教授会で通達され、学生諸君との二人三脚でやり遂げようと思いを決した。

学内では121種、1,500本の植栽を計画、7つの附属校にリストを配布し希望を募った結果、2校がそれぞれ1,250本の要求があり、総計で約4,500本に及んだ。次いで京都市小学校園研究会を介して約180の市立小学校に資料を送り、残りは市立中学数校、さらに大阪府の中学1校に依頼した。

11月、大学での植栽が始まった。学内では唯一、生物学の土倉教授の全面的協力を得たことは精神的にも計りしれないほどの大きな支えとなった。学生諸君は鈴木嘉之君ら農学専攻生及び理学科の田中徹君をはじめとする環境研究会の面々で、休日もいとわぬ献身的な活躍は特筆すべきものであった。技術的にも中核となって真に事業を推進していただいたのは農場の吉田治、岡本弘両技官で苗木の運搬にもあたってもらった。私は配布先の希望樹種・数量の調整、苗圃での識別、指示など全般的な事業推進の他、「学校環境緑化論」の講義の後半を植栽実習に当てた。

技術、機器などあらゆる面で恵まれた大学でも約半年に亙る苦闘があった。それぞれの学校園でのご苦労、とくに千余を植えてくださった附属校のそれは如何ばかりかと唯頭が下がるのみ。

12月半ば、会計課長から声がかかった。寸暇を惜しんで植樹に励む姿に感激、と40万円を捻出していただき学生諸君に配布できたのは正に想定外の喜びで

あった。また、事務局が移植を業者に見積もらせた結果は650万円と漏らされた。

フウは800本あり、どうしても約200本は嫁入り先がなく苦慮していたら、試験場では気を利かして地際から伐採してしまった。実は長い地上部があればテコで抜根できたものを、と立ち往生！ 附属高校の広瀬博先生が業者に手配されユンボで解決してくださった。紆余曲折の末、三月半ばすべての苗木を搬出し農場から耕運機を運び苗圃を美しく均し終えたときには、この半年の日々が思われ、この日を迎えることができたのも試験場をはじめ上述のみなさんのお陰と、不覚にも涙腺が緩むのを禁じ得なかった。その足で所長さんを訪ね報告とお礼を申し上げたところ、独自に処理すれば250万円かかるところで予算も無く、と深甚な謝意を表された。



産技実習棟西のカナメモチ(正面)とオオカメモチ(奥)

爾来30年、あるものは枯れ、あるものは耐震工事などの理由で伐採されたが残ったものは立派に成長し学内の緑化に貢献している。各地の学校園の木々の今日に思いを馳せつつ、さらに選ばれた一部のものは100年の風雪に耐えて子孫に豊かな緑陰を与えるであろうと楽しい夢は大きく膨らんでくる。

注：大学に植栽した45科121種の詳細は京教大「農場季報」13号.p.5, 1983参照

第46回近畿教育系大学農場等協議会の開催

平成24年11月16日（金）11:00-16:00
於京都教育大学

標記の協議会が、本学にて開催されました。当日は、神戸大、和歌山大、大阪教育大、奈良教育大、富山大、本学の6大学から16人が参加して、午前、午後と活発な協議と情報交換を行いました。最初に、本学の位藤学長にご挨拶していただき、午前の部に各大学から提案された課題等について約1時間協議。その後、安東副学長にも参加していただき、なごやかに記念撮影。昼食後、環境センターに移動し、センターの施設見学を実施、2時半から4時すぎまで午後の協議会を行いました。それぞれの農場に限られた予算や人員の中で工夫しながら、様々な活動をしていることがよく分かり、今後の活動に有意義な会となりました。次年度は神戸大学で開催されます。



第46回 近畿教育系大学農場等協議会（平成24年11月16日 京都教育大学）

協議課題

1. 農場等施設の教育的活用の促進方法について
2. 生産物の附属学校における利用と事務処理について
3. 外部団体からの施設利用についての処理、利用料金等の規則整備の状況について
4. 外部一般市民等の研究員協力制度の有無、実態について

農業実習

後期の農業実習も、1月で終わりました。年末には、しめ縄づくりやお餅つきを行って新年の準備をしました。年が明けてからも、春の準備のために、果樹の剪定、花の植え替え、ネギの植え付けなど様々な活動を行いました。授業の最後はトラクターの運転体験。初めての経験に、緊張感を漂わせながらも楽しそうに運転していました。



餅つき。お餅をたべる留学生



果樹の剪定作業



九条ネギの植え付け



トラクターの試運転

中学生の体験学習



（培養実験にチャレンジ中）

夢キャンパス大作戦-ピザ窯をつくろう

昨年センターにピザ窯を作り始めました。夢キャンパス大作戦の3年目、最終年度の活動です。日本人学生だけでなく、留学生や市民の方々、伏見工業高校の生徒さんまで参加して下さって順調に作業が進みました。完成後は、みんなでピザ・パーティをする予定です。



まず整地からスタート



基礎のブロックをつむ。市民の方も応援にかけつけて下さった。



伏見工業高校生が応援に来てくれた



火床と上部の焼き床完成。この上に蒲鉾型の上蓋がのっかって完成。試験が終わってから最終作業の予定です。

日韓学生交流会 (12月21日)

韓国南ソウル大学などの学生と大学教員(計30名)が環境センターを訪問されました。午後、大学で日本人学生や市民の方々と、環境問題をめぐる討論会を行いました。



挨拶する梁川センター長



討論会での発表風景

センターの花々

プリムラ・マラコイデス

(*Primula malacoides*)



中国雲南省、四川省に分布するサクラソウの仲間です。本来毎年咲く多年草ですが、高温多湿に弱く花後に枯れてしまうことが多いため、園芸では一年草として扱うことが多い。秋にタネをまいて翌春の花を楽しむのが一般的です。日本へはヨーロッパ経由で明治末に渡来しました。葉や茎に白い粉が付くので、ケシヨウザクラ(化粧桜)の和名があります。

野生種は草丈20cm~50cm、主な開花期は早春~春です。花茎を長く伸ばして

段状にたくさんの花を付けます。花茎は3cm~5cm、色はピンク、淡紫、白などがあります。多くの園芸品種があり、草丈、花の色や大きさなどは様々です。サクラソウの名前で苗が流通することも多いですが、従来のサクラソウ(日本サクラソウ)とは別種の植物です。(以上、Web「ヤサシイエンゲイ」より、http://www.yasashi.info/hu_00008.htm)

現在、センターの温室内で見事に咲いています。センターに来られた際にはぜひご覧下さい。

センター時暦

11月

11月1日(木)~11月9日(金) 京都市立下京中学校「生き方探求・チャレンジ体験」2年生女子1名5日間受け入れ、京都市音羽中学校「同体験」2年生男子2名5日間受け入れ、京都市立藤森中学校「同体験」2年生男子1名3日間受け入れ、京都市朱雀中学校「同体験」2年生男子1名3日間受け入れ、京都市太秦中学校「同体験」2年生男子1名4日間受け入れ、京都市桃山中学校「同体験」2年生男子5名4日間受け入れ

11月9日(金)から11日(日) 学園祭実行委員会による藤陵祭でのコスモス大作戦に協力 当日に、藤森学舎で栽培したコスモスから、花卉を利用した「しおり」やプレゼント用のお花を作成してプレゼントする活動を実施

11月16日(金) 第46回 近畿地区教育系大学農場等協議会 本学が当番大学で実施。神戸大学、和歌山大学、大阪教育大学、奈良教育大学、富山大学から関係者が出席

11月22日(木) ボランティア「槐の会」活動 センター内清掃、除草、タマネギ定植、他、約20名

11月23日(金、祝) 第24回KYOのあけぼのフェスティバル2012に出展参加 ワークショップ テーマ「ハボタンを育ててみよう」 於、京都テラス

11月30日(金) 附属特別支援学校高等部 稲もみすり、精米 高等部生徒30名と教員9名

12月

12月5日(水) 伏見工業高校生 ピザ釜制作

12月21日(金) 韓国の学生と引率教員 センター内見学、午後大学藤森学舎にて、日韓の学生交流会の開催 韓国学生25名、引率教員5名、本学学生20名、教員5名他、国立若狭青少年自然の家との共催

12月21日(金) ボランティア「槐の会」活動 センター内清掃、落ち葉片付け、除草等

2月

2月24日(日) 伏見区地域ごみ減量推進会議主催 伏見区役所総合庁舎1階にて開催の「エ〜コと伏見“2013”」に出展予定 京都教育大学環境教育実践センターの環境教育有機物リサイクルシステムを用いた食の循環の教育について

スタッフから

岡本正志

とうとう退職となりました。京都教育大学での最後の2年間を、このセンターで過ごすことができました、感謝、感謝です。有り難うございました。

辻 俊夫

現在センターでは、冬期の作業として花木の剪定を行っています。常緑樹以外は、落葉し寂しい風景ですが、その中で、赤々とした花を身にまとっている山茶花が、ひときわ印象的です。

志賀真人

センターの樹々もすっかり葉を落とし、アースカラー中心と思われませんが、ロウバイの薄い黄色、山茶花の赤、ブロッコリの緑と、結構色とりどりです。葉を落とした樹木には多くの野鳥が訪れ、地域の方々も双眼鏡片手にお見えになられている冬のセンターです。

編集後記

今号は、坂東先生原稿で巻頭を飾ることができました。挿入されているカワムツの絵は、坂東先生の自筆スケッチです。すばらしいですね。ご無理をお願いして本当に良かった。

今年の冬は寒い。編集子の庵では、何度も雪が積もり、水道管が凍ってしまいました。部屋の中では、薪ストーブを焚きっぱなし。

さて、編集子はこれでおさらばです。読者の方々の励まして、11号まで続けることができました。有り難うございました。(O)